

過日、2025年の万国博覧会の開催地が大阪に決まりました。エキスポ70から55年ぶりの大阪万博、そして、それに先立つ2020年には前回の東京五輪から56年ぶりに東京オリンピックが開催されます。半世紀余の隔たりを経て、まさに歴史が繰り返されています。前回の万国博覧会、オリンピックは、高度経済成長のダイナミズムを背景にした国家主導のイベントでしたが、今回は大阪や東京といった自治体が牽引して誘致したという印象を受けました。

およそ半世紀前の国際的なイベントは、新幹線や高速道路建設といった国家的プロジェクト実現の原動力となり、日本は国際的地位を確固たるものにし、国内的には国民生活の格段の向上が図られました。しかし、その一方で、「日本列島改造論」に象徴される国土開発により日本列島は急激に変貌しました。「地球は人間を必要としない。だが、人間は地球が必要だ。」このことを念頭において、将来に向けてのオリンピック、万国博物館が開催されることを祈るばかりです。

それでは、調査を終了した横江遺跡や欲賀西遺跡、下之郷遺跡の調査成果と秋季特別展、歴史入門講座の開講などをお伝えしていきます。

発掘調査だより

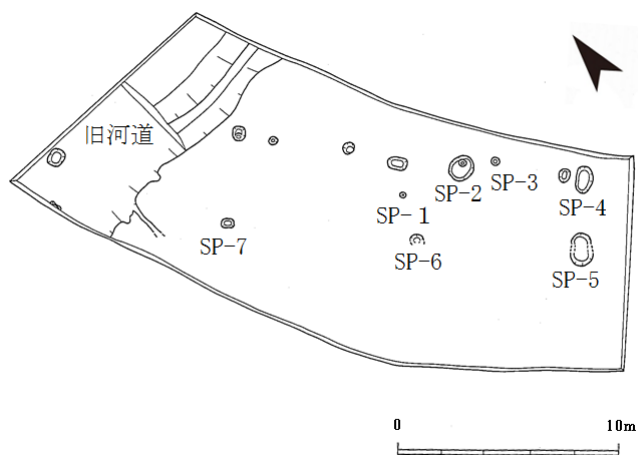
横江遺跡 第10次調査

第10次目を数える横江遺跡の発掘調査は、大門町字下大藪において、10月17日～10月19日の期間で実施しました。今回の調査は宅地造成工事に伴うもので、開発予定地 1,739㎡のうち、県道片岡栗東線につながる北側の道路予定地部分で、調査面積は約110㎡でした。

調査の結果、地表下40～50cmの深さで旧河道、ピットを検出しました。今回調査地の向かい側の老人福祉施設建築工事に伴った、平成25年の調査でも旧河道を検出しており、この地点まで旧河道が広がっていたことがわかりました。また、旧河道を挟んで遺構の密度が少なくなっていることから検出遺構は北西側に広がっているものと推測されます。

なお、遺物はピットから土師器^{はじき}や須恵器^{すえき}、黒色土器^{くしよくどきわん}などが出土しており、およそ鎌倉時代の時期が考えられます。

堀田



横江遺跡第10次調査遺構平面図



検出遺構写真

欲賀西遺跡 第6次調査

欲賀西遺跡第6次調査は、9月10日に開始し、10月22日で終了しました。2箇所の調査区からは、下図のとおり、溝9条や土坑、ピット、旧河道が見つかりました。調査成果のあらましを報告します。

まず、調査区1ですが、東西方向に伸びる溝1からは弥生土器が出土していて、周辺に弥生時代の集落の存在を予想することができます。溝2は南北方向に蛇行しながら伸びる溝で、幅2～3m、深さ40～70cmを測ります。溝の中間では数本の杭を検出しています。遺物は土師器の小皿や焙烙、瓦質の釜や火鉢、信楽焼、瀬戸焼、常滑焼などの陶器や青磁のほか、箸や下駄などの木製品も出土していて、鎌倉時代から室町時代の溝であることがわかりました。

溝3は南北方向から調査区中央で西方に屈曲していて、建物を囲う区画溝と考えられます。ここからは、土師器の皿や信楽焼のすり鉢、瀬戸焼の甕、灰釉碗、口径4.5cmほどの銅鉢が出土しました。溝3が囲う内側の柱穴には、平らな石が置かれており、出土遺物を考え合わせると、お堂のような建物の存在がうかがえます。

次に、調査区2の溝5は、溝幅3～3.5m、深さ0.7～1mを測ります。信楽焼や常滑焼、瀬戸焼の陶器、青磁などの磁器が出土したことから、鎌倉時代から

室町時代の溝と考えられます。また、溝6は東西方向に流れる深さ約45cmの溝で、須恵器の杯身や高杯などの出土遺物から、古墳時代後期の溝と思われます。

調査地周辺では、南側隣接地の昭和63年～平成元年の調査で、弥生時代中期～鎌倉時代までの集落跡が見つかっています。また、東側では年度当初の4次調査で弥生時代中期から15世紀までの遺構が見つかることから、室町時代の集落の西限が、およそ今回の調査区あたりになると考えられます。

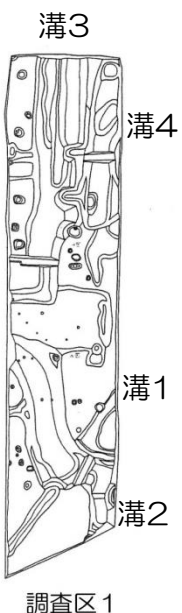
畑本



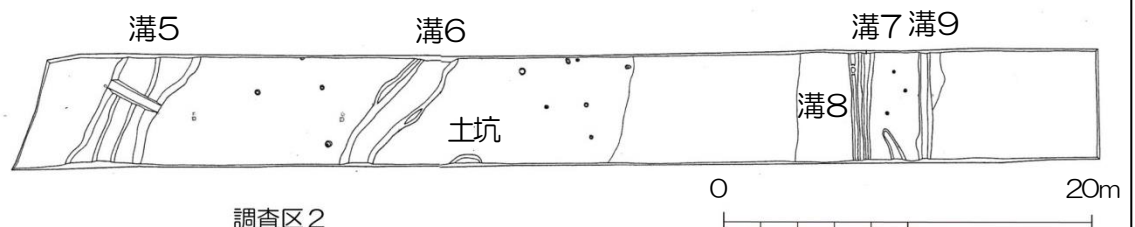
欲賀西遺跡第6次調査位置図



調査区1 全景写真



欲賀西遺跡第6次調査検出遺構平面図



下之郷遺跡第115次調査

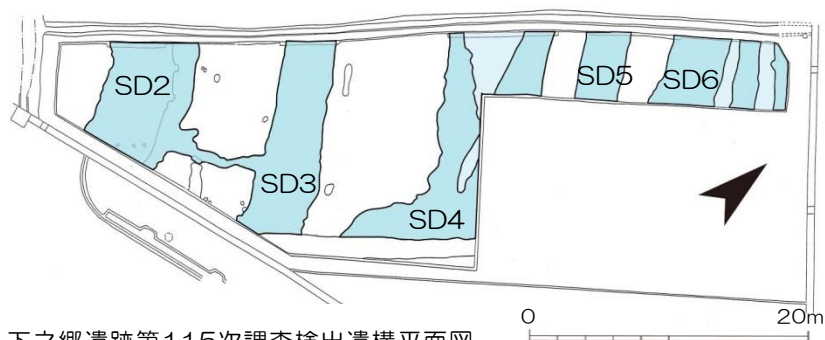
下之郷二丁目のくすのき通り北西の隣接地で開発が計画されているため、8月10日から11月20日までの期間で確認調査を実施しました。

この場所の南側では、平成11年のくすのき通り建設の際に実施した25次調査で環濠が見つかったため、今回の調査地からも環濠の検出が予想されていました。

調査の結果、下図のとおり、調査地全面で、並行する5条の溝（SD2～SD6）を検出しました。このうち、SD2は約6m、SD3は約5mの溝幅を測り、環濠集落の外縁に掘られた第2環濠と第3環濠（それぞれ内側から2番目・3番目）にあたり、さらに外側で見つかったSD4～SD6も25次調査で確認した第4～6環濠のいずれかにつながるものと考えられます。



下之郷遺跡第115次全景写真

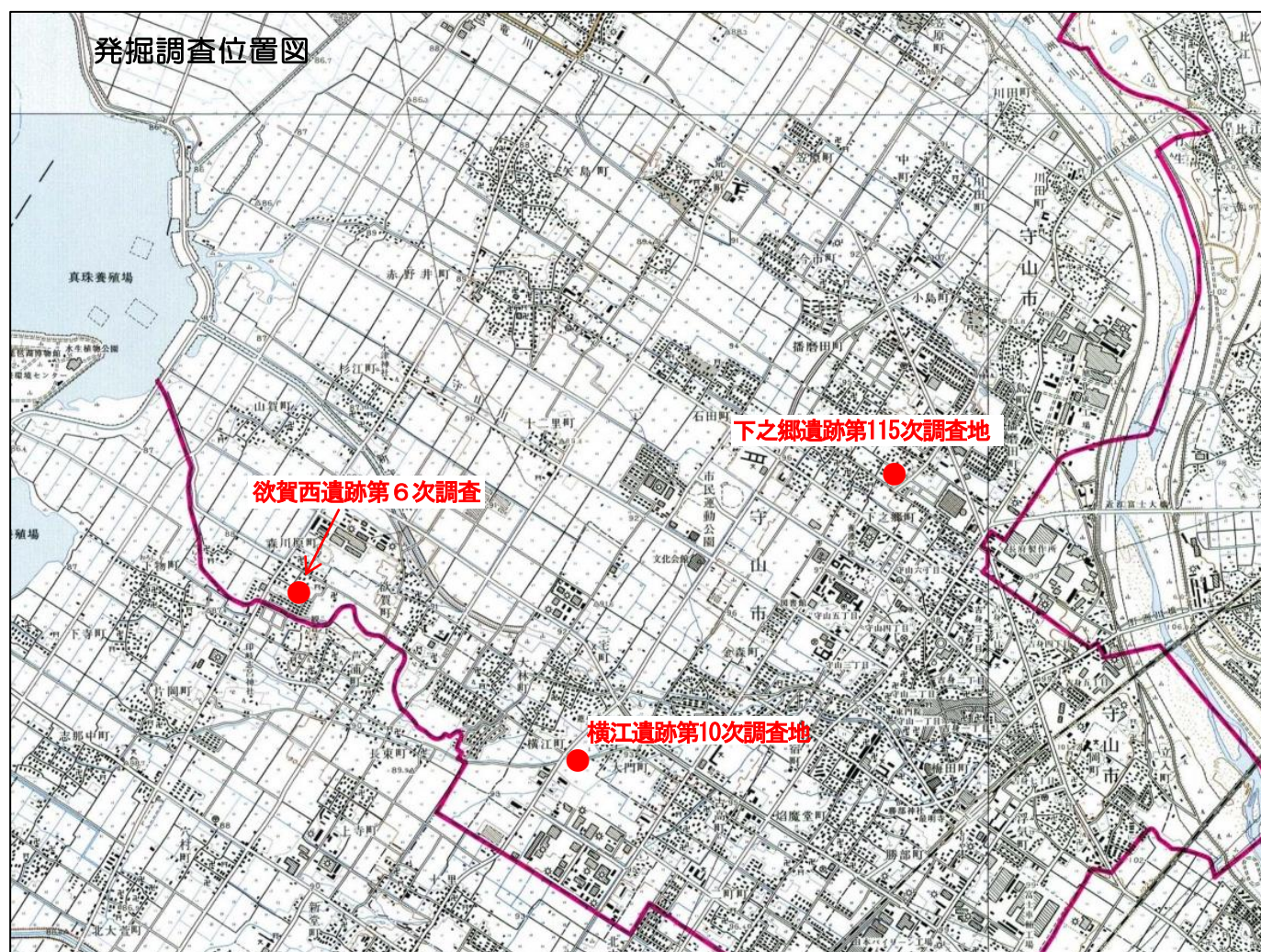


下之郷遺跡第115次調査検出遺構平面図

たSD4～SD6も25次調査で確認した第4～6環濠のいずれかにつながるものと考えられます。

なお、今回の調査は、地下遺構の種類や規模、検出位置等を把握することを目的としているため、遺構の掘り下げは行わずに埋戻して保存しています。

川畑



トピックス

平成30年度秋季特別展 開催を終りました！

「ひと・モノ・遺跡―遺跡には、行き交った人やモノの残影が映る―」を開催テーマに10月1日（月）から開催しておりました秋季特別展は11月30日（金）をもちまして終了いたしました。

開催期間中は、多くの皆様に観覧いただき、ありがとうございました。また、展示についてお寄せいただいた御意見は今後の展示に活かしていきたいと考えています。

なお、常設展準備のため、12月15日（土）までの期間を臨時休館とさせていただきます。



特別展見学風景

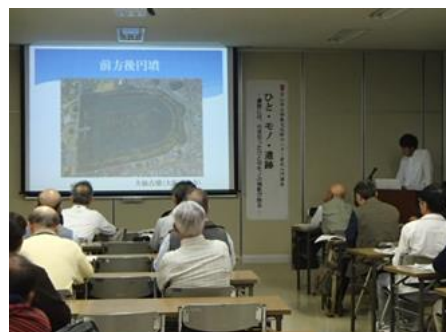
平成30年度秋季特別展講演会、歴史入門講座第5講を開催しました！

秋季特別展講演会を10月8日（月・祝）、歴史入門講座第5講を20日（土）に開催しました。

まず、特別展講演会は、畑中英二さん（京都市立芸術大学准教授）を講師に、「遺跡にみる人・モノの行き交い」というテーマで講演していただきました。講演は、展示しているココヤシ容器や人やモノの行き交いを象徴する稲作文化を織り交ぜながら進行し、受講者の皆さんにとっては秋季特別展をより理解することができました。



秋季特別展講演会風景



第5講講演風景

そして、翌週末の20日（土）の歴史入門講座第5講は、講師に公益財団法人滋賀県文化財保護協会の宮村誠二さんを迎えて、「古墳時代の墓から見える交流の残像」をテーマに開催しました。

講演は、古墳の基本的な解説からはじまり、埴輪などの細密な観察に及び、古墳時代社会なり、古墳築造に関わる人の交流やモノの流通につての宮村さんの考えを分かりやすく話していただきました。畑中さん、宮村さんありがとうございました。

なお、15日（土）には、本年度の歴史入門講座を締めくくる第6講を開催します。講師は、野洲市教育委員会文化財保護課長の進藤武さんで、永原御殿の調査成果を、「徳川将軍家・永原御殿跡の調査」と題して講演していただきます。当日でも受講できますので、是非御参加ください。

【後記】11月末まで開催していましたが秋季特別展の下ごしらえで、古代の文字資料のひとつである「木簡」を調べておりましたが、平城京出土の木簡の中に、「充食馬」の文字を見つけました。馬肉を食べて食欲を充たしたのかと読み進めますと、そうではなく、木簡そのものは役人の呼出し状で、「食馬」の食は食費、馬は交通手段を指し、「手当を出すので役所に出てきなさい。」といった意味だと分かりました。平城京には多くの官吏（役人）が働いていましたが、遠隔地から週に何日か勤務する下級役人も多くいたことが分かっています。

律令国家成立期の7世紀後半から8世紀代にかけてのおよそ150年間に、実に13回の遷都、10年余りで都が遷っていきます。すべての役人が都やその周辺で暮らすためのインフラ整備は大変なことで、このような役所に遠路通勤するパートタイムが支えていた、現在にも通じる様相も古代の文字資料からうかがい知ることが出来ます。

（馬耳東風）